

國學院大學學術情報リポジトリ

酒上不埒の狂歌：附・全狂歌ならびに索引

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 正明 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000781

酒上不埒の狂歌

―附・全狂歌ならびに索引

中村 正明

キーワード

酒上不埒 恋川春町 狂歌 戯作 黄表紙

序

黄表紙作者として知られる戯作者恋川春町の、黄表紙以外の目立った文芸活動としてまず狂歌をあげることができる。春町には絵師としての側面もあり、また少数ではあるが洒落本や噺本なども著している。しかし、黄表紙と密接な関連を表わしながら、同時期に並行して活動が行われた狂歌は、それら以上に注目すべき要素が多く見られるのである。

恋川春町の狂名は、酒上不埒といった。狂歌師としての酒上不埒は、存在をよく知られながらもその活動の全貌は不明であった。唯一まとまった成果として挙げられるのは、広瀬朝光の「恋川春町の狂歌」である。当論では、不埒の詠歌数をわずか二十首ほどとして、十種類の狂歌集に収められた作歌を全て挙げ、それらに注釈を加えていた。

しかし、その後先賢によつて狂歌・狂文資料の調査が進み、狂歌集などの影印化・活字化なども行われたことで、新たに不埒の狂歌を多数確認することができるようになった。

そこで、それら狂歌集や資料類を縦覧した上で、本稿は新しい情報を踏まえて酒上不埒の狂歌について総括的にまとめることにする。また、資料として、不埒の全狂歌及び索引を附す。

一、狂歌師酒上不埒

まずはじめに、狂歌師としての酒上不埒について考えていきたい。

狂名「酒上不埒」については、その命名の由来など詳しいことはどこにも言及された資料はない。飲酒した際の不屈きな行動を表わした戯名であるから、春町自身が酒癖が悪かったことに起因する命名であったのだろうか。

さて、狂歌師一般について総合的にまとめられた書は存外少ないが、幾つかの伝記書に不埒について触れているものがある。もつともまとまった記事が見られるのは、四世絵馬屋額輔が著した『狂歌人物誌』であろう。以下、その記事を引く⁽²⁾。

酒上不埒

酒上不埒は源姓にして倉橋氏なり通称を寿平といふ恋川春町また寿山人とも号す駿州小島侯の家臣にして小石川春日町に住す故に恋川春町といふなり安永のころ金銀先生栄花の夢といふ草紙を著しまた高慢齋行脚日記を著して名声一時に昇る其他くさくの著作あり是か為宝曆已来草紙のさま一変せしといふ寛政元年七月七日享年四十六歳にて没す内藤新宿北裏成覚寺に葬る法号「寂靜院廓誉湛水居士」といふ辞世の歌に

生涯苦楽四十六年 即今脱却浩然帰天

われもまた身はなきものと思ひしが今はのきはぞくるしかりけり^{る歎}

ここには黄表紙作者としての名声のほかに狂歌に関する記事はなく、辞世歌が引かれているのみである。

また、慶應義塾大学三田メディアセンター所蔵『狂歌知足振』⁽³⁾写本には、書写した野崎左文による狂歌師略伝が同綴されている。不埒

に関する記事は『狂歌人物誌』よりも短く、以下のようなシンプルな記事である。

酒上不埒 恋川春町

恋川春町。寿山人、又高慢齋と号す。通称倉橋寿平。松平豊後守の臣にして、小石川に住す。寛政元年七月七日歿、年四十六。

では、昭和期にまとめられた狂歌師人名事典である狩野快庵の『狂歌人名辞書』⁴ではどうか。そこには、不埒、春町の両戯号が収められている。

不埒 酒上不埒、別号恋川春町、通称倉橋寿平、東都小石川春日町に住す、黄表紙作者として名高し、寛政元年七月七日歿す、年四十四、谷中浄覚寺に葬る。(春町を看よ)

春町 恋川春町(初代)号寿山人、通称倉橋寿平、名は格、狂歌の号を酒上不埒といふ、駿河小島侯の家臣にして東都小石川春日町に住せり、安永四年、「金々先生榮華夢」と題する草双紙を著す、所謂黄表紙作者の元祖にして是より後草双紙の趣向一変す、又画を鳥山石燕に学び、自著の黄表紙には自画のもの多し、寛政元年七月七日歿す、年四十四、四谷成覚寺に葬る。

ここでも、狂歌師としての不埒の行跡功績は記されていない。

つまり、酒上不埒は、狂歌師としてはさほど目立つ人物ではなかったということであろうか。実際、これらの記事には、狂歌にまつわる挿話の代わりに、黄表紙の鼻祖としての春町に関する記事が目立つばかりである。

こうした「黄表紙作者春町」という固定的観念は、何も後年の人々ばかりの印象ではなかったらしく、春町と同時代においても同様の認識がされていたようである。例えば、南畝の狂文『ひびき川江戸花海老(天明二年刊)』には「されバ十代の作者恋川はる町も酒の上のふらちと名のり喜三二も手がらの岡もちとなりて狂歌をよんで見たい記をあらハシ…」という一節が見られる。黄表紙作者として名の知られた春町や喜三二が狂歌界に足を踏み入れたという意で、すでに斯界で著名人となっていた二人が、急激に注目されるようになった狂歌壇に足跡を標したことをいっている。明和期(一七六四―一七七二)に唐衣橋州や四方赤良・朱楽菅江らによって芽を出し、安永期に次々と枝を広げ、天明期に大輪の花を開かせた、所謂天明狂歌界に、春町らはその当初から参加していたわけではないことを述べているのである。後にも記すが、春町が狂歌師不埒として活動していた時期は思いのほか短く、それは天明期の数年間に限られていた。そうした後発の狂歌師であったため、周囲からも黄表紙作者が狂歌に手を染めるようになったのだというように見られていたらしい。

『市川 江戸花海老』以外にも、役者評判記を擬した狂歌師評判記『狂歌師評判記』〔評判〕俳優風〔わきぶり〕（天明五年跋）の「狂哥芝居役割兼題目録」には、「作者の部」として、手柄岡持（朋誠堂喜三二）と併せて酒上不埒の名が記されている。また、『吉原細見』を模した人名録『狂歌師細見』（天明三年刊）では、不埒は狂歌師としての評価を附されておらず、「戯作者」という別項の筆頭に喜三二と春町が置かれているのであった。これらを見ても、あくまで黄表紙作者の余業として狂歌に携わっていたのだという認識が成されていたことが理解されるであろう。

また、そうした認識は、遺された不埒の歌が極めて少ないことにも表われていると言えるかもしれない。公刊された狂歌集には、不埒は数えるほどこしか入集していない事実は示唆的であるともいえるだろう。

二、狂歌師としての活動と狂歌壇

（1）活動期間

それでは次に、不埒が狂歌師として実際どのような活動をしていたかを確認していくことにする。

まず、不埒が狂歌師として活動していた期間であるが、諸書の記述には明示されてはいないものの、天明二年から七年にかけての時期であったと推測される。

不埒の狂歌活動を記すもっとも早い記事と考えられるのが、狂文『としの市の記』⁵⁾である。狂歌師の面々と蔦屋重三郎で落ち合い、吉原大文字屋に遊ぶ様子が描かれるのだが、その日付が天明二年十二月十七日とある。その顔ぶれを見ると、四方赤良、朱楽菅江、元木綱、加保茶元成といった狂歌界の中心的な人物であり、彼らと並んで、書肆蔦屋重三郎や絵師北尾政美・北尾政演、戯作者唐来三和などが列している。彼らは、黄表紙作者として春町と縁のあった人々である。

こうした中でも特に、同じ武家であり、かつ戯作にも携わっていた赤良との交友が、不埒の狂歌活動にとって大きな存在であったことは指摘しておいてよいだろう。不埒の参加した狂歌会やさまざまな行事には必ずといってよいほど赤良の名は見えるし、赤良の母の六十賀を祝して刊行された『狂歌 老萊子』（天明四年刊）にも、不埒は黄表紙めかした祝賀の言葉を送っている。また、『としの市の記』を収め

た諸家随筆集『游戲三昧』や不埒自筆詠草を収めている『栗花集』も赤良の編んだものである。そうした密接ともいふべき交友の最初期の記事としてあるのがまさに『としの市の記』なのである。

それを端緒にして、天明三年以降の赤良・菅江らの関わっている狂歌会や行事には不埒の名が散見されるようになっていく。また、『万載狂歌集』(天明三年刊)に始まり次々蔭生された狂歌集の多くに、不埒は狂歌を入集していくようになっていった。それはまさに天明狂歌の爆発的流行の時期と重なるわけで、不埒もその一翼を担う狂歌師のひとりであったということは確かである。

そして、天明七年を迎えて江戸幕府内で大きな政変があつて、七月に松平越中守定信が老中首座に就任したことにより、改革政治が断行されることになった。その改革の一環として武士らに対する文武奨励が徹底されるようになり、武家で戯作や狂歌に携わっていた者たち(赤良、不埒、岡持など)は一斉にそれらから手を引くことになってしまふのである。それは天明狂歌にとつても画期であり、不埒の狂歌活動もその動きに合わせて行われ、終焉を迎えたということができよう。

(2) 狂歌壇と交友関係

続いて、狂歌壇における不埒の交友関係について触れておこう。

右に四方赤良との密接な関係については述べたが、それ以外で深い係わりがあつたという人物は諸書からは計り知れない。しかし、狂歌活動における狂歌師同士の関係性はある程度見て取ることができそうである。

天明狂歌壇における人間関係を知るに当たっては、天明三年にまとめられた狂歌師人名録『狂歌知足振』『狂歌師細見』を参考に考えることができるだろう。

普栗釣方編『狂歌知足振』は、狂歌が大流行している最中、天明三年四月頃に刊行された人名録であるが、各狂歌師がそれぞれ所属している「連」ごとに分けて記されている。数寄屋連と目される連に始まり、小石川連、朱楽連、吉原連、堺丁連、芝連、本丁連、四方連までの八連であるが、不埒はそのうち本丁連所属六十五名の末尾に置かれている。

平秩東作編『狂歌師細見』の方は、天明三年の『吉原細見』を徹底的に模して作られた狂歌師人名録のだが、面白いのは、代表的な

狂歌師を遊女屋の主人に見立てて、その身近で共に活動している狂歌師をその店抱えの遊女の態で記している点である。不埒は「恋川屋春介」という遊女屋主人に見立てられており、以下、次のような遊女めかした名が位付とともに並んでいる（下段は、石川了氏により比定された狂歌師名）。

恋川屋春介

酒上不埒（本丁連）

町すミ 小川

小川町住（四方連）

ミヤキ 不明

沢辺 ほたる

沢辺帆足（四方連）

ふしわら 中ぬき

節原仲貫（四方連）

ほなみ にした

帆南西太（小石川連）

酒のミ おやぶん

酒呑親分（四方連）

まや輔 うまや

厩のまや輔（朱楽連）

もてる

不明

ものおと

物音響（四方連）

みつつぐ

星屋光次（四方連）

かねみつ

久寿根兼満（四方連）

ひとりね

独寝欠（四方連）

なんたら

何多良方士（小石川連）

ことぶき

〔万歳寿（山手連）〕

千代の

〔千代榛名（山手連）・千代有員〕

はまの

まさこの

浜のきさこカ

ぬけた

不明

やりて まち

(春町の意カ)

遊女名らしくもじっているので実際の狂歌師との対応が困難なものもあるが、石川了氏がその比定を行なったおかげでほとんどの狂歌師が判明している。⁶⁾

ここで興味深いのは『狂歌知足振』と『狂歌師細見』を比較してみると、不埒の属するグループとして併記された狂歌師に共通した名がほとんどないことである。前者が本丁連のメンバーであるのに対して、後者は狂歌連を越えた狂歌師たちがそこに並んでいる。このことは実際の狂歌活動が連を越えた形で行なわれていたことを表わしているだろう。

更に別資料を見てみたい。両書と同じ天明三年六月十五日に不埒が主催した「狂歌なよごしの祓」という会があつて、その催しに関する狂文を不埒自身が記している。自筆写本は残されていないが、慶應義塾大学三田メディアセンターに野崎左文による写本が所蔵されている。⁷⁾ それによると、催しは隅田川に屋根舟を浮かべて行なわれたという。その文中に、当日の参加者たちの布置が、見開き一丁に挿絵とともに書き込まれている。狂歌師の名は全部で九つのグループ(舟)ごとにまとめられているが、特に連の名は記されず、代わりにグループごとの目印らしき幟や提燈が描かれている。

不埒の属するグループのメンバーには、酒呑親文 帆南西太 節原中貫 馬屋厩輔 沢辺帆足 小川町住 星屋光次 久寿根兼光 物音響 独寝欠 酒上不埒の十一名が並ぶ。一目して分かるように、このメンバーは『狂歌師細見』に記された狂歌師名に全て見えるものばかりである。つまり、ここに挙げられた狂歌師たちが、不埒とともに狂歌活動を行なっていた人びとだったのである。

続いて、不埒が参加した狂歌会や催事についてまとめておくことにしたい。諸書から拾った以下の催事は必ずしも狂歌を詠むことを目的としているものも含むが、あくまで狂歌仲間による集まりであることが明白なものを挙げている。

○天明二年十二月十七日

・ 葛屋重三郎宅〔参加者〕春町・重政・政演・政美・安田梅順・藤田金六

・ 吉原大文字屋〔参加者〕春町・赤良・菅江・田阿・三和・政美・政演・梅順・葛重・元木綱・加保茶元成(『としの市の記』)

○天明三年正月十三日 京橋伊勢屋勝助にて元木綱狂歌会

〔参加者〕三十余人（『巴人集』・『奴胤』・『万載集著微來歴』）

○天明三年三月十九日 春町主催日暮里狂歌大会（『狂歌知足振』・『巴人集』花已下三首、酒上不埒、日暮里大会）

○天明三年四月二十五日 竹杖為輕主催宝合の会（『狂文宝合記』）

○天明三年六月十五日 隅田川にて春町主催「狂歌名よごしの被」（『狂歌名よごしの被』）

○天明元（三年）七月五日 新吉原燈籠会「参加者」赤良・菅江・山手白人・不埒ほか全四十七名（『燈籠会集』）

○年月不明 向島散策（『四方のあか』下「向島賦」・『巴人集』酒上不埒・地口有武など、むかふ島の酒家むさしやのもとにてさげをよめる）〔参加者〕赤良・腹唐秋人・不埒・地口有武

○年月不明 京橋にて浜辺黒人の主催した夷歌の会。不参加のため歌を送る（『栗花集』「浜辺黒人京はしと言へる所にて夷歌の会催しけるおりさわることありて詣ふてさりければよみておくりける短歌」）

判明する限りにおける狂歌関係の催しは以上であるが、勿論明記のされていない行事参加もあろうことから、その数はより増えるものと推測される。年月不明としている会も恐らくは天明三年前後の開催と想像されよう。決して頻繁な参加とは言いつても、自ら狂歌会を二度主催していることなどからも、後発の狂歌師とはいえ不埒は狂歌壇において一目置かれた存在であったということは言えるだろう。

（3）狂歌と黄表紙について

さて、狂歌師酒上不埒には常に黄表紙作者恋川春町の影がつきまといつていことは前に触れたが、その不埒と春町をつなぐ象徴的な黄表紙作品が幾つかある。それは、天明四年刊『万載集著微來歴』（蔦屋重三郎）・『吉原大通会』（岩戸屋源八）と天明八年刊『鎌倉太平序』（鱗形屋孫兵衛）の三作品である。それらの概要を簡単に紹介する。

これらのうち、特に『万載集著微來歴』は、作品世界の中心に天明狂歌界が据えられている作品として注目すべきであろう。その外題からも判るように、赤良・菅江編による天明狂歌集の嚆矢『万載狂歌集』の刊行にまつわる裏事情を、『平家物語』の世界に仮託して描い

ているのである。『万載狂歌集』の名称が、鎌倉時代初期の勅撰集『千載狂歌集』から採っていることは明白だが、この『千載集』にまつわる故事として「都落ちする平忠度が危険を冒して藤原俊成に詠草を託した」というものがあり、その挿話と源平合戦の諸相をベースにして、そこに天明狂歌界の内紛的事情を被せて作られたのが『万載集著微来歴』という作品である。

具体的にいうと、狂歌師仲間であった四方赤良、朱楽菅江、唐衣橘州、平秩東作らの間の感情的不和から、お互いに牽制し合った結果、赤良・菅江編『万載狂歌集』と橘州・東作編『狂歌若葉集』という二種の狂歌集が、ほぼ同時期に刊行されたことを指す。その経緯については、『江戸の戯作絵本(二)』における宇田敏彦の作品解説に詳しいのでそちらに譲るが、かなりの真実が『万載集著微来歴』中に託されていたらしい。

また作品中には、天明三年正月十三日に京橋伊勢屋勝助にて開催された、約三十余人の参加者による元木網狂歌会の様子を写した図も描かれており、天明狂歌の活況を見せる資料ともなっている。とともに、本作の存在自体が天明狂歌の隆盛を表わす象徴的な作品になっていると言えるだろう。

この『万載集著微来歴』に対して、『吉原大通会』は天明狂歌界を中心的世界としてはいないが、作中に天明狂歌壇の代表的な面々(すき成「月成こと喜三二」・赤良・木網・菅江・定丸・常閑・東作・裏住・秋人・元成)が勢揃いする一図(七ウ・八オ)が描かれていて、やはり狂歌の流行を背景とした作品であることを示している。その図に書き込まれた言葉はみな狂歌界の楽屋落ちとなっており、今では到底知りえない情報ばかりが記されているため、読解が困難な作品である。

『鎌倉太平序』は、『万載集著微来歴』で描かれた狂歌界の確執を改めて作品化したものである。刊行は天明八年であるが、その原稿が完成したのはやはり天明四年頃と推定される。本作もやはり『平家物語』の世界に仮託しており、鎌倉山に住む大通儒菅荘兵衛と梶原景時との対立・謀略の物語に、赤良と橘州の軋轢を重ねている。本作の趣向に関しては、宇田敏彦が「春町の『鎌倉太平序』をめぐって」に詳細な比定考察を行っているので参考にしていたいただきたい。

三作品とも、狂歌が大流行している天明三〜四年に、その内情を穿つ形で作られた黄表紙である。こうした作品の執筆が可能だったのも、恋川春町が酒上不埒として狂歌壇の中心に近い位置で活躍していたからに他ならない。

三、酒上不埒の狂歌

さて、最後になったが、本章において不埒の狂歌作品の実際について確認と考察を試みたい。

序でも述べたように、近年天明狂歌に関する資料について調査が進みつつあり、『江戸狂歌本集成』全十五巻⁽¹²⁾に代表されるように、狂歌・狂文類の活字化資料が整ってきた。その結果として、酒上不埒の新出狂歌も多数確認することができるようになったのである。

そこで、新たに確認された作品も含めて、不埒の狂歌を収録した全ての書目等をまず列挙しておくことにする。⁽¹³⁾

- 『としの市の記』(天明二年十二月記事／四方赤良編『游戲三昧』所収／写本／天理図書館蔵)
- 『万載狂歌集』(天明三年正月刊／四方赤良・朱楽菅江編／須原屋伊八ほか)
- 『狂歌猿の腰掛』(天明三年八月序／浜辺黒人編／三河屋利兵衛・花屋久治郎)
- 『落栗庵狂歌月並摺』(天明三年十一月刊／元李綱編／伊沢八郎兵衛・上総屋利兵衛)
- 『燈籠会集』(天明三年か／四方赤良序／板元不明／大東急記念文庫蔵)
- 『變老菜子』(天明四年刊／四方赤良編／葛屋重三郎)
- 『狂歌すまひ草』(天明四年正月刊／普栗釣方・宿屋飯盛・なますの盛方・つむりの光著／松本善兵衛・今福勇助・満々堂清吉)
- 『狂歌鶯蛙集(故混馬鹿集)』(天明四年十二月刊／朱楽菅江撰／葛屋重三郎)
- 『徳和歌後万載集』(天明五年正月刊／四方赤良編／須原屋伊八ほか)
- 『吾妻曲狂歌文庫』(天明六年刊正月刊／宿屋飯盛編／葛屋重三郎)
- 『新玉狂歌集』(天明六年正月刊／四方赤良編／葛屋重三郎)
- 『狂歌才蔵集』(天明七年正月刊／四方赤良編／葛屋重三郎)
- 『栗花集』(天明八年夏跋／四方赤良編／写本／静嘉堂文庫蔵)
- 『四方のあか』(天明年間刊／大田南畝著・石川雅望編／葛屋重三郎)

- 『我おもしろ』(文政三年正月刊／手柄岡持作・平沢太寄編／丸屋甚右衛門・角丸屋甚助刊)
- 『仮名世説』(文政八年刊／四方赤良著／角丸屋甚助・角丸屋徳三郎)
- 恋川春町墓碑(新宿成覚寺)
- 『狂歌人物誌』(明治か／四世絵馬屋頼輔著／写本／国立国会図書館蔵・早稲田大学図書館蔵)

これらの版本・写本類に不埒の狂歌がそれぞれ何首ずつ収められているかという点、次のような数である。

- 『としの市の記』 一一 ○『万載狂歌集』 三 ○『狂歌猿の腰掛』 四
- 『落栗庵狂歌月並摺』 一 ○『燈籠会集』 一 ○『猿老菜子』 一
- 『狂歌すまひ草』 三 ○『狂歌鶯蛙集』 一 ○『徳和歌後万載集』 九
- 『吾妻曲狂歌文庫』 一 ○『新玉狂歌集』 一 ○『狂歌才蔵集』 三
- 『栗花集』 八七 ○『四方のあか』 一 ○『我おもしろ』 一
- 『仮名世説』 一 ○恋川春町墓碑 一 ○『狂歌人物誌』 一

歌数はのべ百三十首に上るが、重複して収録されている狂歌や、てにをはが異なるだけの相似歌も相当数ある。そこで、そうしたテキストの整理をしなければならないだろう。

(1)『栗花集』について

その前に、不埒の狂歌をもっとも多く収めている『栗花集』について触れておきたい。

四方赤良によって編まれた本書は二冊から成る写本（静嘉堂文庫所蔵『大田南畝雜著』中五十七・五十八）で、卷一は赤良その他の筆に拠る狂歌・狂文七品を収め、卷二は六人の狂歌師各自筆の狂歌詠草と狂詩七品を収録している。天明八年夏の赤良跋文があることから、それ以前より蒐書していた狂歌仲間の詠草類を天明八年に綴じ合わせたものであることが判る。

それらのうち、卷二に不埒自筆の狂歌詠草が収められている。卷二目録には「酒上不埒藁 恋川春町也」と記され、詠草の初めには「狂歌」とのみ墨書きされている。

本書はすでに『江戸狂歌本集成』第二巻に翻刻紹介があり、また濱田義一郎「栗花集について」という論考⁽¹⁵⁾も備わっているので、ここで不埒詠草についての濱田の言を一部引いておく。

狂歌は長歌一を含めて八十七首。狂歌集に入る作には肩に「後万春」というように赤良の書込みがあるが、思い違いの誤りが多い。また「已二万載集二人」などの書込みもあるから『後万載集』を撰ぶ時分に不埒から貰ったのであろう。

赤良が狂歌集を編纂するに当たり撰歌するための原資料として不埒にまともでもらったのがこの詠草だということである。濱田は、赤良書込みから天明五年刊『徳和歌後万載集』編輯に際して不埒から受け取ったものであると推定しているが、異論はない。天明七年刊行の『狂歌才蔵集』に入首した意の書込みがあるのは、後に書き足したものなのだろう。もともと、赤良書込みには誤りが相当数あることは事実である。⁽¹⁶⁾

この不埒詠草は、自筆写本であるという価値のみならず、公刊された狂歌集に収録されていない作歌を多く収めている点で、極めて珍重さるべき好資料である。『栗花集』にしか見られない狂歌が六十一首に上るのである。また、推敲を経たであろう相似歌も何首か確認できる。それらを考え合わせると、不埒の狂歌について考える上で、欠くことのできない重要な資料であることは指摘しておきたい。

(2) 酒上不埒の狂歌

不埒の狂歌を総論的に見た時、まず気になるのは、諸本に同じ歌が収められている場合、推敲か誤写による言葉の異同が幾つか見られることである。これらの異同は、ほとんどが各版本所収歌と『栗花集』所収歌との比較において見出されるものである。

例えば、『狂歌鶯蛙集』卷十三と『栗花集』には、それぞれ「寄體恋」の同題で読まれた狂歌が収められている。(傍線は異同部で、中村が附した。以下の引用歌はみな同様。)

・あま酒のなれそめしより此あちのかはるへしとはくみもしらすよ (『狂歌鶯蛙集』)

・あま酒のなれ初し夜はこの味のかはるまひそとくみかはしつ、 (『栗花集』)

この二首は、ほぼ同じ文言を用いているところから、推敲を経た同根の歌と考えるのが妥当であろう。しかし、内容としては「かはるべし」と「かはるまひそ」というように、逆のことを詠んでいることに気付く。成立はほとんど同時期と思われるが、恐らくは「かはるべし」から「かはるまひそ」へと推敲を施したものである。甘酒に託した相聞歌であるので、ここは甘さ(恋心)が変化しないことを望む感情と捉える方が良いからである。

また、『狂歌猿の腰掛』と『栗花集』には、それぞれ次の狂歌が収録されている。

・みよしの、山もり雑煮春来ぬと湯気も霞て芋はみゆらん (『狂歌猿の腰掛』)

・みよし野、山もりそう煮はるきぬと言ふはかりにや湯気に霞める (『栗花集』)

この二首もまた上の句が同じことから、どちらかが推敲をしたものと考えられる。この場合は、『狂歌猿の腰掛』の刊行が天明三年初秋頃であり、『栗花集』の成立が『徳和歌後万載集』編輯時(天明四年頃)とすれば、自ずと後者の方が推敲を施した歌だと推測できるだろう。

同様の指摘は次の二首においても適用できるだろう。

・佛の瓦もけふはあら玉の春来にけりとすりみかきつ、 (『狂歌猿の腰掛』)

・佛のかはらされともあら玉の春なりとすりみかきちらしつ (『栗花集』)

次の二首では、その逆の方向性が確認できる。

・きのふこそ煤をとりしか夢のまに葉竹そよきて門松そたつ (『栗花集』)

・きのふこそ煤はとりしかいつのまに葉竹そよきて門松そたつ (『徳和歌後万載集』)

『栗花集』をもとにして『徳和歌後万載集』の撰歌が成されたとするならば、当然後者が推敲後の歌ということになる。

次の二首もまた同様である。

- ・ 野辺にまた葉ものひかねし鶯葉つめは|かすかなねにこそありけれ（『栗花集』）
- ・ 野へにまた葉ものひかねし鶯葉つめ|かすかなねにこそありけれ（『徳和歌後万載集』）

そうした推敲の関係を確認できるものとは別に、気になる歌が『狂歌猿の腰掛』に見られる。

- ・ 黄金のはたかに|なれは御ほとけのしやくせんたんを横にねはん会（『狂歌猿の腰掛』「涅槃会」）
- ・ 黄金のはたか身なれは御仏の借せんたんを横にねはん会（『狂歌猿の腰掛』「涅槃会」）

一つの狂歌集中に、一文字異なるだけでほかの文言は全く同じ狂歌が収められているのである。題はそれぞれ「涅槃会」と「灌仏」。同じと言ってもよい題が冠されているところを見ても、これは重複歌と考えるのが妥当だと思うのだが、いかがだろうか。なお後考を要する。ちなみに、この狂歌は『栗花集』にも収められており、そちらでは「涅槃会」という題、「はたか身なれは」という句形で記されている。

そして、最後に『栗花集』からは外れて、春町の墓碑に刻まれた辞世の狂歌について簡単に触れておこう。この狂歌は、後世になって書き写されて、『狂歌人物誌』という写本の記事に記されることになるのだが、そこにも細かい異同が確認できる。

- ・ われもまた身はなきものとおもひしが|今ハのきハ、|さひしかり梟（恋川春町墓碑）
- ・ 我もまた身はなきものと思ひしに|今ハのきハ、|苦しかり梟（『狂歌人物誌』早稲田本）
- ・ われもまた身はなきものと思ひしが|今ハのきハ、|苦しかり梟（『狂歌人物誌』国会本）

これは、単純に誤写であると断定してよからう。但し、『狂歌人物誌』には早稲田大学図書館所蔵本と国会図書館所蔵本の二本があり、それぞれ異なったてにをはが見られる点は気になるところである。これもまた後考を俟ちたい。

さて、こうした推敲前後の異同が認められる歌は便宜上別の狂歌として数え、誤写は同歌としておくと、不埒の狂歌は全二〇九首ということになるのである。

跋

狂歌師酒上不埒が、黄表紙作者恋川春町の影を負っていたという指摘は何度かしてきたのだが、それは黄表紙を創始した作者としての評価が浸透していたためである。

では、狂歌師としての評価はどうだったのだろうか。同時代の不埒評というのは残念ながら見当たらないが、それは、狂歌集などに公表された狂歌の数が決して多くなかったからではないかと考える。菅竹浦は、『近世狂歌史』において「狂歌の方面にはまとまった著作が無いやうである。しかし狂歌は中々巧みであつた⁽¹⁷⁾」といった言い方をしているが、まさに書き留められた形の狂歌作品が少ないことが、不埒の無評価の原因となっているのだろう。

それでも菅竹浦の「狂歌は中々巧みであつた」という言にも託されているように、不埒歌には、天明狂歌の特徴ともなっている多彩なレトリックがふんだんに盛り込まれている。また、明確な江戸賛美歌はないものの、そこに暮らす者としての息遣いがはっきりと表現されているように思うのである。例えば、『徳和歌後万載集』巻十一や手柄岡持（喜三二）家集『我おもしろ』に見られる、喜三二の仲介によつて再婚することになった自身の感慨を綴る詠歌などは、なかなか人間味が溢れているといえよう。⁽¹⁸⁾

本論においては、あえて各歌の解釈にまで踏み込むことをしなかった。それは、単純に新出歌の数の問題からである。そのため、不埒の狂歌における個性については言及できないが、広瀬朝光は「恋川春町の狂歌」の中で二十首の解釈をした末の結論として、不埒の狂歌の特徴を次のように記している。

その基調をなすものは諷刺であり、生活の苦しさ、知人との交際などに題材を取ったものが多い。技巧的には、天明調狂歌に特色ある本歌取、同音異義語（両用言葉）、掛詞（尻取）、縁語などの多用が目立っている。

こうした指摘を得て、新たに新出歌を中心として解釈・考察を深めていくことが今後の課題となるだろう。

註

(1) 『戯作文芸論 研究と資料』(昭和五十七年・笠間書院)所収。

- (2) 『江戸狂歌本集成』第十五卷（『江戸狂歌本集成』編集委員会編・平成十九年・東京堂出版）所収。
- (3) 普栗釣方編『狂歌知足振』は天明三年に刊行された狂歌師人名録であるが、慶應義塾大学三田メディアセンター所蔵本は野崎左文が書写した当該書の写本であり、左文による狂歌師略伝が補筆されている。
- (4) 昭和三年・横尾文行堂・廣田書店。
- (5) 大田南畝（四方赤良）編『遊戯三昧』（天理図書館善本叢書40『蜀山人集』昭和五十二年・八木書店）所収。
- (6) 石川了『江戸狂歌壇史の研究』（平成二十三年・汲古書院）中「第一章 天明狂歌をめぐる諸相 第四節『狂歌師細見』の狂歌作者比定」。
- (7) 註(3) 資料と同綴される。
- (8) 現代教養文庫『江戸の戯作絵本（二）』（昭和五十六年・小池正胤ほか編・社会思想社）所収『万載集著微来歴』解題より。
- (9) 註(8) と同書の『万載集著微来歴』解説。
- (10) 日本書誌学大系48（1）『黄表紙総覧 前編』（棚橋正博著・昭和六十一年・青裳堂書店）より。
- (11) 『近世文芸研究と評論』（第十二号・昭和五十一年・早稲田大学文学部）所収。
- (12) 『江戸狂歌本集成』編集委員会編・平成十一年・東京堂出版。
- (13) 不埒の狂歌を収めた書の影印資料・活字化資料の書誌を、参考としてまとめておく。
- 『としの市の記』（天理図書館善本叢書『蜀山人集』に影印所収・昭和五十二年・八木書店）
- 『万載狂歌集』（『江戸狂歌本集成』第一巻・平成九年・東京堂出版）
- 『狂歌猿の腰掛』（『江戸狂歌本集成』第一巻・平成九年・東京堂出版）
- 『落栗庵狂歌月並摺』（『江戸狂歌本集成』第一巻・平成九年・東京堂出版）
- 『燈籠会集』（『天明文学 資料と研究』濱田義一郎編・昭和五十四年・東京堂出版）
- 『難老菜子』（『五世市川团十郎集 白猿と江戸文壇』日野龍夫編・昭和五十年・ゆまに書房）
- 『狂歌すまひ草』（『江戸狂歌本集成』第二巻・平成九年・東京堂出版）
- 『狂歌鶯蛙集』（『江戸狂歌本集成』第二巻・平成九年・東京堂出版）

○『徳和歌後万載集』(『江戸狂歌本集成』第二卷・平成九年・東京堂出版)

○『吾妻曲狂歌文庫』(日本古典文学大系57『川柳狂歌集』杉本長重・濱田義一郎校注・昭和三十三年・岩波書店)

○『新玉狂歌集』(『江戸狂歌本集成』第三卷・平成十年・東京堂出版)

○『狂歌才蔵集』(『江戸狂歌本集成』第三卷・平成十年・東京堂出版)

○『粟花集』(『江戸狂歌本集成』第二卷・平成九年・東京堂出版)

○『四方のあか』(『大田南畝全集』第一卷・昭和六十年・岩波書店)

○『我おもしろ』(『江戸狂歌本集成』第十卷・平成十二年・東京堂出版)

○『仮名世説』(『大田南畝全集』第十卷・昭和六十一年・岩波書店)

○『狂歌人物誌』国立国会図書館蔵本(『江戸狂歌本集成』第十五卷・平成十九年・東京堂出版)

(14) 註 (13) 参照。

(15) 『大妻女子大学文学部紀要』第十号(一九七八年三月・大妻女子大学文学部)

(16) 『粟花集』の赤良による書込み間違いは、『徳和歌後万載集』『狂歌才蔵集』に当該歌が収録されているという傍記であるが、次に抄出した狂歌は全て右狂歌集には収められていない。

・(後万恋) あま酒のなれ初し夜はこの味のかはるまひそとくみかはしつ、

・(後万冬) 又六か杉のこかけもはらわねは雪に通ひの道たへにけり

・(後万雑) 一歩より聖の道をふみはしめ千里の功をなし給へかし

・(後万夏) 山の手のはつほと、きすおとつれてちよつと狂哥をかきの卯の花

・(後万祝) 竜宮ていむへき魚のなきからをとりかはす世そめてたかりける

・(才蔵春) 逃て行く鬼のかはふんとしの内にはやきん玉の春は来にけり

・(才蔵春) 子の日とて千代のためしに松都か杉山流の琴をこそひけ

・(才蔵冬) もろともにもふりぬるものは書出しとくれ行く年と我身なりけり

- ・ (才藏冬) しら雪はこれ南籙の銀世界すなはちへんくせん^くとふるなり
- ・ (才藏者) 夜は門さすかやしきのはつ午はき、とうく^くと太鼓うつなり
- ・ (才藏祝) 傾城のむしんの文のふる反古金につもりてみればめてたき
- ・ (才藏雜) もらひえてのそみたるまの盃をひらくや大悟てつ亭主ふり
- ・ (才藏恋) 婚礼の新まくらなる台所もつともしるはこほすへらなり
- ・ (才藏雜) 鳶とんて天ちてとんとうかれてや鯉も生簀の淵におとり子
- ・ (才藏夏) 稲つまもすもからけて女中衆のかみなりふりをくつすゆふ立

(17) 昭和十一年・中西書房。

(18) 春町の再婚に関する狂歌は、次の二首である。

- ・ 喜三二のなかたちにて妻をむかへけれ 酒上不埒

婚礼も作者の世話で出来ぬるはこれ草本のゑにしなるらん (『徳和歌後万載集』)

- ・ 酒上不埒妻をむかへしに二親のこゝろにかなはで子ある中をわかれての、ち後妻をむかへよとす、むる人あれば不埒

おもひ子^子はにえこちるともま、母の手鍋^{飯(左) 俵(右)}にかけすたきもりたてむ (『我おもしろ』)

+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+

凡例

- 翻刻資料のあるものはその表記を採った（註14参照）。
- 原本からの翻刻は原文表記を活かした。

☆ 『としの市の記』(天明二年十二月十七日)

- 銭無しは市にあたへもしうれんのむしろとうしんなりとかわなん
- 七重八重やまふき色はあるなれとからかさ一本なきそかなしき
- から笠のなくてふりくるしきしまのみちをせめても心さらなん(十一才)
- 金の御□□あら□□んきにさあ□□□つよもまいらせん
ふらち
- 行としのけふ哥あすかと暮し夜になか／＼し事を読みつ、
不埒
- 我おもふ人やまつちの山の名にこゝろせきやの里もほとなし
おなしく
- 中たんほちかひもふかき泥路を大慈大悲とたとる市の夜
ふ埒
- か□□ことをたくすこよひきたむきの風のふくをいとわざりけり
ふ埒
- もてなしのよひから衣三河やへきつゝなれ／＼しくもなりぬる
ふ埒

○ ふ埒

ともし火にほのく見ゆるゆふかはかほちやかやとのひかる君たち
○ 雨もふるこのあかつきの衣くはいろのさめなんことおしそ思ふ

☆『万載狂歌集』(天明三年正月刊)

▽卷十

○ 酒上ふらち 恋川春町

千とせ丸とかきれる船も碇つなのなかきためにしに万代やへん

▽卷十四

○ 肴壳生酔 酒上ふらち

はつさげに赤ゑひまきれひらめかす尾ひれやはらをたちの魚うり

○ 波きり不動の堂のまへなるそば屋にてそばをたうへて 酒上ふらち

うちよする客にそはやのいとまなみきりし手きはのふとうこそあれ

☆『狂歌猿の腰掛』(天明三年八月序)

○ 酒上不埒

佛の瓦もけふはあら玉の春来にけりとすりみかきつゝ

○ 雑煮 酒の上不埒

みよしのゝ山もり雑煮春来ぬと湯気も霞て芋はみゆらん

○ 涅槃会 酒上不埒

黄金のはたかなれは御ほとけのしやくせんたんを横にねはん会

○ 灌仏 酒上不埒

黄金のはたか身なれば御仏の借せんたんを横にねはんゑ

☆『落栗庵狂歌月並摺』(天明三年十一月刊)

○ 灌仏 酒上不埒

黄金のはたか身なれば御仏の借せんたんを横にねはんゑ

☆『燈籠會集』(天明三年刊か)

○ 酒上不埒

油火にこかる、君か影法師をちとまかきのまはり燈籠

☆『羅老萊子』(天明四年刊)

○ (老木花寄袋祝) 酒上不埒

しめく、りよくおさまれる大君の御代ハ千秋ばん袋かな

☆『狂歌すまひ草』(天明四年正月刊)

○ 船夕立 酒上不埒

いそぎなはぬれましものをもと船の舳さき晴行夕立の空

○ 寄反古祝 酒上不埒

傾城の無心の文のふる反古金につもりてみればめてたき

○ 老女懐旧 酒上不埒

酒上不埒の狂歌 | 附・全狂歌ならびに索引

銀のひんさしもいろめきしまたわけくすおれて老のしらか元結

☆『狂歌鶯蛙集』（天明四年十二月刊）

▽卷十三

○ 寄體恋

酒上不埒

あま酒のなれそめしより此あちのかはるへしとはくみもしらすよ

☆『徳和歌後万載集』（天明五年正月刊）

▽卷一

○

酒上不埒

きのふこそ煤はとりしかいつのまに葉竹そよきて門松そたつ

○

酒上不埒

野へにまた葉ものひかねし鶯菜つめとかすかなねにこそありけれ

○ 西行忌

酒上ふらち

とふらふも他生のゑんゐ上人にふしの煙のそらなきはせし

○ 帰雁

酒上不埒

うちすて、年をこしちのかりかねはやよひかきりにかへすへらなり

▽卷三

○ 前栽の菊見んとて人の来りければ

酒上不埒

おかしけにくるへる菊の花見んとたちよれる人のはらやかゝゑん

▽卷五

○ とみにたひたち侍りし時友とちのもとへ 酒上不埒

夢になりとしろしめしたかけふふしに旅をするかへかとしてなすのを

▽巻七

○ 寄袋祝

酒上不埒

しめく、りよくをさまれる大君の御代は千秋はん袋かな

▽巻十

○ くそくひらきの日紀定磨来りければ

酒上不埒

五十歩も百歩もをなし足もとのよろいよりひと酔給へかし

返し

むた口何のやくにもた、かひをもつてた、れぬほどに酔けり

▽巻十一

○ 喜三二のなかたちにて妻をむかへけれ

酒上不埒

婚礼も作者の世話で出来ぬるはこれ草本のゑにしなるらん

恋川
春町

☆『吾妻曲狂歌文庫』(天明六年正月刊)

○

酒上不埒

もろともにふりぬるものは書出しとくれ行としと我身なりけり

☆『新玉狂歌集』(天明六年正月刊)

○

酒上不埒

人なみにやぶれのしめを引かけてまけじとひちをはるはきにけり

☆『狂歌才藏集』（天明七年正月刊）

▽卷二

- 酒上不埒

三月はつくれと質のふるあはせうけぬかきりは春にそありける

▽卷六

- 餅搗 酒上不埒

すさまじくなきは師走のよもすからさえわたりたる餅搗の音

▽卷十一

- 寄體恋 酒上不埒

あまさけの三国一のおすかたをのみそめしより胸そこかる、

☆『栗花集』

▽卷二

- 狂歌 儉微士五味上 酒上不埒藁

- 春のはしめによめる

玉くしけ二きれ三きれおやわんの雑煮に腹の春は来にけり

- （後万春）きのふこそ煤をとりしか夢のまに葉竹そよきて門松そたつ

- 佛のかはらされともあら玉の春なりとすりみかきちらしつ

- 賤女のわさは春たち縫ひ初にいとふりぬるいその上下

- 晦日の夜あかしにすまぬ春の来て海士のしほたれ上下そきる

○ 年の内に春たちける日よめる

(才藏春) 逃て行く鬼のかはふんとしの内にはやきん玉の春は来にけり

○ 若菜

なへて買ふけふ鶯のはつ若菜きけは一把の音こそ高けれ

○ (後万春) 野辺にまた葉ものひかねし鶯葉つめはかすかなねにこそありけれ

○ 子日琴

約そくにねのひの床をしきのへのまつまを千代とひくや玉琴

○ (才藏春) 子の日とて千代のためしに松都か杉山流の琴をこそひけ

○ 寄體恋

(才藏春) 體のさん国一のおすかたをのみそめしよりむねそこかる、

○ (後万恋) あま酒のなれ初し夜はこの味のかはるまひそとくみかはしつ、

○ 下女試筆

あら玉の年のはしめに包丁て下女なへすみをかきそめにけり

○ かな釘のお礼てう筆とりくくに下女こゝろみる紋つけの紙

○ 乞食子日

子の日する野辺にはたかの宿なしは赤まつの身に
千代のためしに風やひくらん

○ 夜うくひすのなきけるをきゝて

よる夜申おもひよらすも鶯のなくはほうほけ狂気なるらん

○ 元船蚊遣

久堅のかやりたつなるもと船はまゝをたく火とあやまたれぬる

○ 佃島御祓

みな月もけふをかきりにつくたなる御祓そ秋のはしめなるらん

○ 寄碗祝

千とせ丸とかきれる船も碗つなのなかきためしに万代やへん

○ とみに旅たつ日友とちのもとへよみて遣しける

（後万春）夢になりとしろしめしたかけふふしに旅を駿河へかとしてなすのを

○ 帰雁

（後万春）うち捨て年を越路のかり金はやよひかきりにかへすへらなり

○ 下手杵碁

不拍子を晦日もちかくきく月の下手のきぬたの秋はてるおと

○ ある人竹の耳かきに哥をゑりておこしたりければよめる

みやけとて君か手つから呉竹のさいくはよにもみゝあかさりけり

○ はや書のちくらかもとへおとなひ侍りて

おさわりはなくと三味線堀の名に駒かけよせて御様子はきけ

○ 十三夜蕎麦

蕎麦切は本膳すみて後の月みつれば秋のおなかなりけり

○ 肴壳生酔

（已二万載集二人）はつ鮭にあかゑひまきれひらめかす尾ひれやはらをたちの魚うり

○ ある人たはれ哥をはな紙にかけつけておこしければ

嬉しくもひらく小さくはな紙は君か手入に匂ふことの葉

○ 長月のはてに友とちのきたりてものかたりし侍りて

香しき君か咄しをきく月の晦日なれとも秋はてぬなり

○ 月前述懐

かくはかりかたふきし身はせんかたも月のいるさの山にやかゝらん

○ (綴じが深いため詞書不明)

(後万秋) おかしげにくるゑるきくの花見んと立よれる人のほらやかゝゑん

○ ある人のもとにもろ鳥のまねする鶉なんありけるこれにたはれ哥よめとありければ
壁に馬のりかけて今歌よめとひよとり越へのさてもきうなれ

○ 波きり不動の堂のまへなるそはやにてそばをたうへて

(已二万載集二人) うちよする客にそはやのいとまなみきりし手きはのふとうこそあれ

○ やふと言ふところのそはやにてそはをたうへて

きり／＼と引しほり汁うちかけてやふのそはには功のものなり

○ 顔見

顔見にわたせる霜の翁さひ白を見れば夜そあけにける

○ 正灯寺と言へるみてらの紅葉見にまかりて

いとまある大みや人にあらねとも紅葉をたしにけふもあそひつ

○ 顔見三日月

霜月もいつか二日とつひたちてけふ三日月の顔見せにけり

○ 突々法師のさる楽の太刀をなん拵へられしを見侍りて

申楽をたち舞ふへくもあらぬ身のさて一ふりのことにおてきや

○ つくりてし太刀はさやより面箱におさまるをこれ見よとお手きは

○ 寄海苔飯釈教

蓮葉の香より妙なるのりめしの味はうき世を捨し身そしる

○ 寄煎鳥神祇

御たらしに心すましてねきことをなべてそかくる加茂の神垣

○ 髪置

千代までも長かれとけふ立給ふかみは万年といわるつるかな

○ （綴じが深いため詞書不明）

（才藏冬）もろともにふりぬるものは書出しとくれ行く年と我身なりけり

○ 懸とりの翁きひしきさいそくにあふてあたまをのみかくやひめ

○ 寅のとしの暮によめる

ありたけをみなむしられし大とらのとしの尻尾のいたみになりぬる

○ 西陣歳暮

世わたりのいろく年もくれはとりあやおりかけをきりはたりてふ

○ 煤はきの日四方赤良のおとつれられければ

たまさかのお出にすゝをとりこみのおりから酒をすゝめつるかな

○ 雪

（才藏冬）しら雪はこれ南鐮の銀世界すなはちへんくせんとうふるなり

○ 雪のふりける日酒たうへることのならさりければ

（後万冬）又六か杉のこかけもはらわねは雪に通ひの道たへにけり

○ としの暮にある人のもとへ大根をおくり侍るとて

珍しくなきからも遠ふ土からくれにし年のおはりはずもの

○ 浅草の市にまかるとて

銭無しは市にあたへもしうれんのむしろとうしんなりとかはなん

○ 深川に遊ひて

芸しや衆たんなさんはしうちすきてゆくや多の茶屋の仲町

○ 餅搗

(才藏) 冷しくなきは師走の夜もすからさへわたりたる餅つきのおと

○ 歳暮

あけかぬる年の関屋にきこゆるはくたかけとりのそら音なりける

○ 晦日もすてに夜中とすきの戸をあけてさし来る春のかけ乞

○ 歳旦

千はや振る神の御代より引はへしことくに門の松竹のしめ

○ 元旦に屠蘇なかりせはしやく銭につかへしむねののつけからまし

○ 春雪

やはらかなものとして春の淡雪はかけた足駄の葉にもたまらず

○ 春のはしめによめる

みよし野、山もりそう煮はるきぬと言ふはかりにや湯気に霞める

○ おさなきもの、ふみはしめを賀し侍りて

(後万雑) 一步より聖の道をふみはしめ千里の功をなし給へかし

○ あるむまやちにてよめる

この宿へまたと来ぬから尻くらい夜のうち乗て旅の衣く

○ 軒とひ風

落るたひ心いたやのひさしよりかやか軒はのちつてとひたこ

○ 寄手鞠祝

とんとおさまりをつくくなる音きけはひいふう御代もしつかなる春

○ 屋敷初午

（才藏者）夜は門さすかやしきのはつ午はき、とうくと太鼓うつなり

○ 奴はつ午

赤鯛さしてたのむは笠森のいなりにとはつ午の口とり

○ 恋手習

はつ花のはやりぬるをわかいしきちよつとよたれそつねりくれかし

○ 涅槃会

黄金のはたか身なれば御仏のしやくせんたんをよこにねはん会

○ 西行忌

（後万春）甲ふも他生のゑんる上人にふしの烟のそらなきはせし

○ 寄反古祝

（才藏祝）傾城のむしんの文のふる反古金につもりてみればめてたき

○ 花

すはつては見へぬ高根のさくら花峰にも尾^{マツ}たちあかさせぬ

○ 乞食恋

玉たれのありしむかしの恋しさをひくや乞食のこもたれの身に

○ 寄生醉祝

生酔の反吐をつくしのはてかけて匂ひくさきもなひく君か代

○ としころのそみぬる達摩と言へる盃を四方赤良のおくられければ

（才藏雑）もらひえてのそみたるまの盃をひらくや大悟てつ亭主ふり

○ 卯月のはしめ山手白人のはしめてきたり給ひてたはれ哥をあふきにかひつけて玉りければ

(後万夏) 山の手のはつほと、きすおとつれてちよつと狂哥をかきの卯の花

○ 老木花

年をへて春の詠となる花は老木くらげの耳たふか^マは

○ 寄袋祝

(後万祝) しめく、りよくおさまれる大君の御代は千秋はん袋かな

○ ある人の婚礼の夜に

幾千代に八千代きふとん新まぐらかはす夜ことも此一夜より

○ 同じ夜にかよひのもの、あやまちしければ

(才藏恋) 婚礼の新まぐらなる台所もつともしるはこほすへらなり

○ 同じおりに

こん礼酒あた、め銚子男銚子のかはるまひそとくみかはしつ、

○ 傾城のかたかきたる画に

とくくゝの流れの身とて苦しみつならぬ柳の水道しりつき

○ むさしの国向嶋と言へるところに鯉の魚をあつものにして諸人にす、むる家ありその鯉のかたかきたる画に

(才藏雑) 鳶とんで天ちてとんとうかれてや鯉も生簀の淵におとり子

○ うたかたのあらひ鯉かはやほならぬ吸物のあかみそしひともし

○ 淀ならてこ、に生ずのあらひ鯉のほる名にめて滝のみの酒

○ 夕立

(才藏夏) 稲つまもすもからけて女中衆のかみなりふりをくつすゆふ立

○ 寄魚祝

(後万祝) 童宮ていむへき魚のなきからをとりかはす世そめてたかりける

○ 浜辺黒人京はしと言へる所にて夷歌の会催しけるおりさわるることありて詣ふてさり

ければよみておくりける短歌

なら坂や この手紙にて 申わけ 参らせ候に 穴かしこ かしこき君か たはれうた 催し玉ふ 京はしの けふの御会そ うらやまし うら山かけて
狂哥しの われもくと おつはたを ぬふてふ鳥の 歌ふくろ 智恵の袋の ひもなかく 長ツちりつて とんさくの 作しや仲間は 高まんの 花咲
は、あ あふむ石 ありし目白の 言の葉を かきあつめたる もしほ草 なくさみ草の はやりすき 過たるはなを およはざる さるのこしかけ 猿の
しり 真ッ赤な兒て 今ころは さへつおさへつ お手もとの もとの木あみ あからさん かん江めへつた あ、めへつた となりのもちを つくおとを
よそにき、つ、 恋川の 流れゆかれぬ かなしさよ これと言ふのも 五斗米に 引れてうちに か、みやま いさ立出て まいられず 貴面の節にと

恐惶謹言

○ 反歌

まからぬをたはれ歌かひ給ふなよ扱もいそかわしきしまの身の

☆『四方のあか』巻下(天明年間刊)

○ 向島賦

花のお江戸のすみだ川、まつち山からむかふ島のけしきは、みめぐりありきても、州崎のまさごのよみつくしがたし(中略)

酒上不埒

みめぐりへたえずに舟のつき雪や花のお江戸のまんむかふ島

☆『我おもしろ』(文政三年正月刊)

○ 酒上不埒妻をむかへしに二親のこゝろにかなはで子ある中をわかれての、ち後妻をむかへよとす、むる人あれば不埒

おもひ子にはえこちるともま、母の手鍋にかけすたきもりたむ

☆『仮名世説』(文政八年刊)

○恋川春町がうたに、

竜宮でいむべき魚のなきがらを取りかはす世ぞめでたかりける

☆恋川春町墓碑(新宿成覚寺)

○生涯苦楽四十六年

即今脱却浩然帰天

われもまた身はなきものとおもひしが今ハのきハ、さひしかり梟

☆『狂歌人物誌』

○生涯苦楽四十六年 即今脱却浩然帰天

我もまた身はなきものと思ひしに今ハのきハそ苦しかり梟(早稲田本)

われもまた身はなきものと思ひしが今ハのきはぞくるしかりけりる(国会本)

酒上不埒の全狂歌・索引

凡例

○初・二句索引とする。

○漢字表記・踊り字は平仮名に起こした。但し、漢字の読みが不明な句については漢字表記を残している。

酒上不埒の狂歌 | 附・全狂歌ならびに索引

○便宜的に濁点を補った。

あ

- ・あかいわしさしてたのむは 『栗花集』
- ・あけかぬるとしのせきやに 『栗花集』
- ・あぶらびにこかる、きみか 『燈籠會集』
- ・あまざけのさんごくいちの 『狂歌才藏集』・『栗花集』
- ・あまざけのなれそめしよは 『栗花集』
- ・あまざけのなれそめしより 『狂歌鶯蛙集』
- ・あめもふるこのあかつきの 『としの市の記』
- ・あらたまのとしのはじめに 『栗花集』
- ・ありたけをみなむしられし 『栗花集』
- ・いくちよにやちよきふとん 『栗花集』
- ・いそきはぬれましものを 『狂歌すまひ草』
- ・いつぽよりひじりのみちを 『栗花集』
- ・いとまあるおほみやびとに 『栗花集』
- ・いなつまもすもからけて 『栗花集』
- ・うたかたのあらひこひかは 『栗花集』
- ・うちすててとしをこしちの 『徳和歌後万載集』・『栗花集』
- ・うちよするきやくにそはやの 『万載狂歌集』・『栗花集』
- ・うれしくもひらくこぎく 『栗花集』

- ・ おかしげにくるへるきくの
『徳和歌後万載集』・『栗花集』
- ・ おさわりはなくとさみせん
『栗花集』
- ・ おちるたひころいたやの
『栗花集』
- ・ おもかげのかわらもけふは
『狂歌猿の腰掛』
- ・ おもかげのかはらされとも
『栗花集』
- ・ おもひごはにえこちるとも
『我おもしろ』

か

- ・ かおみにわたせるしもの
『栗花集』
- ・ かくはかりかたふきしみは
『栗花集』
- ・ かぐはしききみがはなしを
『栗花集』
- ・ かけとりのおきなきびしき
『栗花集』
- ・ かなくぎのおれいてうふで
『栗花集』
- ・ かべにうまのりかけていま
『栗花集』
- ・ からかさのなくてふりくる
『としの市の記』
- ・ か□□ことをたくすこよひ
『としの市の記』
- ・ きのふこそすすはとりしか
『徳和歌後万載集』・『栗花集』
- ・ きりきりとひくしほりじる
『栗花集』
- ・ ぎんのひんさしもいろめきし
『狂歌すまひ草』
- ・ 金の御□□あら□□んきに
『としの市の記』
- ・ ぐわんたんにとそなかりせば
『栗花集』
- ・ げいしやしゆうたんなさんはし
『栗花集』

- ・ けいせいのみしんのふみの 『狂歌すまひ草』・『栗花集』
- ・ ごじつぼもひやつぼもをなじ 『徳和歌後万載集』
- ・ このやどへまとこぬから 『栗花集』
- ・ こんれいぎげあたたためてうし 『栗花集』
- ・ こんれいのにいまくらなる 『栗花集』
- ・ こんれいもさくしやのせわで 『徳和歌後万載集』

さ

- ・ さるがくをたちまふべくも 『栗花集』
- ・ さんがつはつくれとしちの 『狂歌才蔵集』
- ・ しづのめのわさははるたち 『栗花集』
- ・ しめくゝりよくをさまれる 『老萊子』・『徳和歌後万載集』・『栗花集』
- ・ しもつきもいつかふつかと 『栗花集』
- ・ しらゆきはこれなんりやうの 『栗花集』
- ・ すさまじくなきはしはすの 『狂歌才蔵集』
- ・ すはつてはみへぬたかねの 『栗花集』
- ・ ぜになしはいちにあたへも 『としの市の記』・『栗花集』
- ・ そばきりはほんぜんすみて 『栗花集』

た

- ・ たまくしげふたきれみきれ 『栗花集』
- ・ たまさかのおいでにすすを 『栗花集』
- ・ たまたれのありしむかしの 『栗花集』

・ちとせまるとかぎれるふねも 『万載狂歌集』・『栗花集』

・ちはやふるかみのみよより 『栗花集』

・ちよまでもながかれとけふ 『栗花集』

・つくりてしたちはさやより 『栗花集』

・つごもりもすでによなかと 『栗花集』

・とくとくのながれのみとて 『栗花集』

・としをへてはるのながめと 『栗花集』

・とびとんでんちてとんと 『栗花集』

・とふらふもたしやうのゑんゐ 『徳和歌後万載集』・『栗花集』

・ともしびにほのほのみゆる 『としの市の記』

・とんとおさまりをつくくなる 『栗花集』

な

・なかたんほちかひもふかき 『としの市の記』

・ななえやえやまぶきいろは 『としの市の記』

・なへてかふけふうぐひすの 『栗花集』

・なまゑひのへどをつくしの 『栗花集』

・にげてゆくおにのかはふん 『栗花集』

・ねのひするのべにはたかの 『栗花集』

・ねのひとてちよのためしに 『栗花集』

・のべにまたはものひかねし 『徳和歌後万載集』・『栗花集』

は

- ・はちすばのかよりのたへなる 『粟花集』
- ・はつさげにあかゑひまぎれ 『万載狂歌集』・『粟花集』
- ・はつはなのはやりぬるを 『粟花集』
- ・ひさかたのかやりたつなる 『粟花集』
- ・ひとなみにやぶれのしめを 『新玉狂歌集』
- ・すさまじくなきはしはすの 『粟花集』
- ・ぶひやうしをみそかもちかく 『粟花集』

ま

- ・まからぬをたはれうたかひ 『粟花集』
- ・またろくがすぎのこかげも 『粟花集』
- ・みそかのよあかしにすまぬ 『粟花集』
- ・みたらしにころすまして 『粟花集』
- ・みなづきもけふをかぎりに 『粟花集』
- ・みめぐりへたえずにふねの 『四方のあか』
- ・みやげとてきみがてづから 『粟花集』
- ・みよしのやまもりぞうに 『狂歌猿の腰掛』・『粟花集』
- ・めづらしくなきからものも 『粟花集』
- ・もてなしのよひからころも 『としの市の記』
- ・もらひえてのそみたるまの 『粟花集』
- ・もろともにふりぬるものは 『吾妻曲狂歌文庫』・『粟花集』

や

・やくそくにねのひのどこを 『粟花集』

・やはらかなものとはるの 『粟花集』

・やまのてのはつほととぎす 『粟花集』

・ゆくとしのけふかあすかと 『としの市の記』

・ゆめになりとしろしめしたか 『徳和歌後万載集』・『粟花集』

・よどならでここにいけすの 『粟花集』

・よるはかどさすがやしきの 『粟花集』

・よるよなかおもひよらすも 『粟花集』

・よわたりのいろいろとしの 『粟花集』

ら

・りうぐうでいむべきうおの 『粟花集』・『仮名世説』

わ

・わうごんのはだかになれば 『狂歌猿の腰掛』

・わうごんのはだかみなれば 『狂歌猿の腰掛』・『粟花集』・『落粟庵狂歌月並摺』

・われおもふひとやまつちの 『としの市の記』

・われもまたみはなきものと 恋川春町墓碑・『狂歌人物誌』国会本・『狂歌人物誌』早稲田本